

2023/03/15

令和4年度新潟建築賞設計コンペ 講評

審査員長 手塚貴晴+手塚由比

大賞となった「佐渡のいはひー汽水の上に結ぶ祝言ー」のチームが審査会場の外のベンチで模型を並べていた。模型を修理していたのか？ それとも仮組をしていたのか？ しかも審査員控室の前で。もちろん出会いを狙ったのではなかろうが、賞をとりに来た気迫に満ちていた。審査員としては公平でなければいけないから、審査に先立って見なかったことにしようとしたが、その洗練された幾何学を記憶から消すことはもはや不可能であった。最終審査に残った作品の中で明らかに突出していた。だからできる限り厳しいコメントを投げかけた。残された古い滑走路を現代の遺構として活用している点。HPを幾何学に巧みに活用している点。優れている。残念ながらこういう人材はNo2になりやすい。危ない。世の中は優秀な人買いに満ちている。どうやってこの才能を活かせるのか審査の間中考えていた。

優良賞・佐渡賞「加茂湖に雲を浮かべる」は大賞にも増して夢に満ちた作品であった。夕暮れ時これらが湖面に浮かび幽幻となり人心を誘う様は容易に思い浮かべることができる。しかし目を凝らすとガラスの建具が入っているではないか。惜しい。考えて見てほしい。もし雨風を忌むのであれば、そもそも湖面に繰り出したりしない。嗜みには常に対価が伴うのだ。労無くして本当の愉しみは味わえない。その妙に気がついてほしい。

優良賞「時を織る。ー結び合わせ馴染んでゆくこの地ー」の完成度は高い。しかし審査員が誰か知っているのにカーテンウォールをつけるべきではなかった。これはもう一つの優良賞に対する批判と似ている。参照した舟屋の本質に気がついてほしい。舟屋の美学は船を手繰り寄せ招き入れる作業にある。舟屋は外であると同時に中である。カーテンウォールは審査の最中におしり取らせて頂いた。パワハラ、アカハラの境地と言われそうであるが、これが私の指導であり愛情である。手塚は変えられない。

私は学生作品の指導が好きである。ほぼ趣味と言って良い。武蔵工業大学、現在の東京都市大学の常勤教員に就任して27年となるが、全く飽きない。学生の指導は作品を創作する行為と似ている。社会へ今抱いている理想を広げられる。一人の作家の力は限られている。未来は君たちの手の中にある。君達は素晴らしい職能を選んだ。厳しい道のりであるが、身につければ一生通用する技である。その職能に定年はない。